384 好酸球増多症候群のGa-67ｽｷｬﾝについて

上野恭一(石川県中 放)、上田幹夫、河村洋一(同 血内)

好酸球増多症候群は、好酸球著増、心肺症状、肝脾腫などをしめす原因不明の疾患群で、多臓器障害、血栓を生じうるが、本症のGa-67 ｲﾒｰｼﾞﾝｸﾞの報告は殆どない.

我々は、3例にGa-67ｽｷｬﾝを施行し、うち2例で異常所見を認めた. 1例は、白血球14600(好酸球51%)で、Ga-67 ｽｷｬﾝでは、両側大腿骨、脛骨に多発性の異常集積を認め、骨髄生検では、骨膜、骨皮質に好酸球浸潤を認めた. もう1例は白血球19000 (好酸球63%)で、Ga-67 ｽｷｬﾝとSPECTでは頭蓋骨、胸腰椎、上腕骨、大腿骨、骨盤などに異常集積を認めたが、X-P,MRIでは異常なし. 骨髄穿刺、生検では骨髄過形成、好酸球増多. またI-123 BMIPP心筋ｽｷｬﾝでは下壁の欠損像も認めた.

Ga-67の異常集積は、骨髄の異常増殖、骨への好酸球浸潤をしめすと考えられ、同症の診断に有用である.

385 食道シンチグラフィの Condensed Image による検討

柏木 徹, 堤 英雄, 磯尾泰之, 鈴木貴弘, 長澤昌史
外山 隆, 尾崎晋一, 内藤雅文, 石橋一伸, 東 正祥
(大阪厚生年金病院 内科)

食道シンチグラフィによる食道通過時間測定に関してCondensed Imageを作成し検討したので報告する.

食道シンチグラフィは, 患者を仰臥位あるいは座位としTc-99m-Sn colloid 37MBqを混入したmilk10mlを4回嚥下させ, 1フレーム0.25秒で30秒間計測して行った. Condensed Imageは各イメージを横方向に積算してカラムとし, これを経時的に横方向に配置して作成した. このイメージからmilkの食道通過状態が1枚の画像として視覚的に容易に把握された. さらにこの画像から経時的に移動する高カウント部位を抽出して時間-放射能曲線を作成し定量解析も試みたので報告する.

386 小児アランチウス静脈管開存症の診断及び治療効果判定における^{123}I-IMP経直腸門脈シンチの有用性

吉良朋広 冨口静二 横山利美 西 潤子 高橋睦正
(熊大放) 池田信二 内野信一郎 (熊大小児外科)

アランチウス静脈管開存症の短絡の程度は臨床上重要であるがそれを知る方法は確立されていない。我々はアランチウス静脈管開存症の3例を経験したので、これに正常3症例を加え報告する。

^{123}I-IMP37MBqを経直腸的に投与し30分間のダイナミックデータを収集した。肝と肺の関心領域のカウントよりシャント率を算出した。また手術の行われた3例については術後にも検査を行った。アランチウス静脈管開存症の3例は平均65.1%のシャント率を認めた。正常3例のシャント率は平均6.3%であった。手術後各症例のシャント率は低下した。^{123}I-IMP 経直腸門脈シンチはアランチウス静脈管開存症の診断及び治療効果判定に有用であった。

387 進行性全身硬化症の食道シンチグラフィ ——皮膚および肺病変との比較——

絹谷 啓子、中嶋 憲一、絹谷 清剛、道岸 隆敏
利波 紀久 (金沢大核)

シンチグラフィにより評価した食道機能と皮膚硬化の進展および肺病変の重症度を比較した。

16例のPSS患者に99mTc-DTPAによる立位と臥位の多数嚥下試験を施行した。皮膚硬化範囲を限局型と全身型に分類した。肺病変の指標に%VC, %DLCOと胸部CT上のfibrosisの有無を用いた。

臥位試験で指摘された食道機能低下と%VC, %DLCOの低下は相関を示した。fibrosisを伴う群の食道機能は有意に低下を示した。皮膚硬化範囲と食道機能に明らかな関連を認めなかった。

PSS患者において食道機能障害と肺病変の重症に関連が示唆された。

388 潰瘍性大腸炎における^{99m}Tc-白血球シンチグラフィ：重症度および白血球除去治療効果の判定

油野民雄, 斉藤泰博, 秀毛範至, 山本和香子 (旭医大・放), 佐藤順一, 石川幸雄 (同・放部), 綾部時芳, 高後 裕 (同・3内)

白血球除去治療は、副腎皮質ステロイド抵抗性で手術の選択が考慮されるような潰瘍性大腸炎の新たな内科的療法として近年注目されている。今回、^{99m}Tc-白血球シンチグラフィ上の腸管放射能描出度のグレード分類を行い、白血球除去治療後の効果判定手段としてのシンチ所見のグレード分類の有用性を検討した。腸骨稜骨髄放射能と対比してグレード分類されたシンチ所見は、内視鏡による重症度 (Matts' 分類) と良好な相関を示し、シンチ所見から重症度を評価しうる結果が得られた。また白血球除去療法が重症度の改善に有効であった12例中10例では、内視鏡所見と共にシンチ所見も改善を示した。

389 FDG-PET と乳房固定台を用いた乳癌描出の試み

油谷健司、植原敏勇、西村恒彦 (大阪大・トレーサ)

乳房固定台使用時(prone)と非使用時(supine)におけるFDG-PET による乳癌描出能を比較検討した。乳癌が疑われた6/12 症例では FDG iv 60 分後より固定台を用いて15 分間 emission scan を施行した後 10 分間 transmission scan を、続いて固定台を用いずに同一の検査を施行した。残りの6症例では先ず固定台を用いず、続いて固定台を用いて検査を施行した。11/12 症例が乳癌、1 症例は乳腺症と診断された。乳癌は固定台使用時、非使用時とも全例描出され、乳腺症の1症例は描出されなかった。描出された乳癌について関心領域(ROI)を設定した所、固定台使用時の ROI 値は 3420±1209、非使用時は 3361±1337 (mean±sd)であった。乳房固定台により FDG-PET による乳癌描出能が向上すると考えられた。

Presented by Medical*Online